船井情報科学振興財団　　報告書　2021 年 3 月

FOS 2016 奨学生　　磯村　真由子

ETH で化学を専攻しております磯村真由子です。ご報告が遅くなりましたが、2020 年の 8 月に無事、博士号を取得いたしました。

2020 年はほとんどコロナ一色でした。年始に日本の一時帰国からスイスに戻った時はまだアジアでしか話題ではなかったのが、あっという間にヨーロッパにも伝染し、3 月下旬にはロックダウンという事態にまでなりました。前回の報告書にも書きましたが、どうせ実験もできないし、8 月末には雇用契約が切れてしまうので、8 月にディフェンスを受けるという計画をたて、その日からホームオフィスにてひたすら書き物をするということになりました。5 月に入ると、一部ロックダウンが明け、制限はあるものの再び研究室に行くことが許されるようになりました。ボスからは「もう論文は書き終えただろうから、秋からくる学生の為になにか、全く新しいプロジェクトを見つけて」との指令を受けました。実際博士論文はまだ出来上がっていませんでしたが、実験に飢えていたことと、ゼロから新しいプロジェクトを立ち上げるのは自分にとっても良いトレーニングだと思い、頑張って取り組むこととしました。研究室の一大プロジェクトになるような劇的な発見ではありませんでしたが、新しい分野に挑戦し、いくつかのヒットを得ることができたのはとても良い経験になりました。そして、7 月の末に博士論文を提出、8 月にいよいよディフェンスを迎えました。3 人の審査員に囲まれ、まずは短いプレゼンテーション。そこから質疑応答（チョークトーク）に入ります。どれも鋭い質問で、非常に焦ったことを覚えています。その後は一旦退室をし、後に再び部屋に呼ばれて結果を報告されるというとんでもなく緊張する数時間でした。

総じて、私のスイスでの 4 年間は非常に充実したものでした。振り返ってみると、本当にたくさんのものを得ることができました。まずは、研究能力。実験技術などはもちろん、論理的思考、論文の書き方など、プロジェクトの発見から論文発表までをすべて一人で成し遂げることが出来たのは、自分にとって非常に自信になりました。次に、海外でやっていく能力。生活するにあたって、言語や文化の違いから日本に比べておおよそ半分くらいしか思ったようにうまく進まなかったと思います。それらは、始めはとてもストレスになりましたが、だんだん慣れてきてちょっとした事で動じない精神を得ることが出来ました。これは今のアメリカの生活にも活かされていて、何か問題が生じても「まぁ、どうにかなるさ」と軽く捉える事ができるようになったと思います。そして、最後に一生の友達。研究室の仲間、特に同じ部屋だった人たちとは本当に良い関係を築くことができて、今でもしょっちゅう連絡を取り合うくらいまで仲良くなることができました。彼らには研究面だけではなく、精神的にも大きく支えられて、感謝してもしきれません。これからも、ずっと仲良くして行けたらと思います。

そして、2021 年 3 月より Harvard University にて 2 年間ポスドクをすることになりました。研究内容は分子触媒の研究です。まだ大学はコロナの影響を大きく受けてかなり制限されていますが、少しずつ新しい環境に慣れていこうとしているところです。これからの 2 年間も、素敵な経験と出会いがありそうで、とてもワクワクしています。船井財団の方々にはこれまでも、これからもお世話になります。この場をお借りして改めて心より御礼申し上げます。

ディフェンス後のアペロ（小さいパーティー）
左：大好きなラボのメンバーと。
右：Bill Morandi 教授(co-examiner)と Erick Carreira 教授(ボス)。